みんなの童話

十六の春 ～母～

わたしは、高校生になり、やっと十六になれると思いました。

わたしは、小さいころから母には口答えをしませんでした。そんなわたしを母は、『素直ないい子です』と、だれにでもじまんしていました。

母にそう言われて、別にいやな気はしませんでした。なんでも言われたことをしていれば、困ることはなかったからです。

学校の行事にも地域のイベントにも参加しました。可もなく不可もなくふつうに過ごし、ごくふつうの女の子でした。

そんなわたしにかまわず、季節は毎年移り変わっていきました。

ところが、中学卒業を間近にしたころ、日めくりの言葉に、わたしは気付きはじめていました。

雪どけの冷たい水を見つめると、こころにつきささるものを感じました。

（この感じはなんだろう）

そう思うと、今までの自分は何を思っていたのだろうと思い始めました。

『今までの自分』と、何度も言ってみました。すぐに答えは見つかりません。自分ではいくら考えてもわからない気がしました。

迷い始めたら、高校に行く目標も見つからなくなりました。

進学することも、苦痛になってきました。勉強が嫌いなのではありません。解ることは楽しいことです。だから、上の学校に行くのか…。迷い出した思いは止まりませんでした。

「いやなことを嫌と言える」

言葉にするには、勇気がいりました。

『高校へ行くことは大切なこと』と、思い切って母に聞いてみたら、

「もちろん進学よ。いまさら何を言い出したかと思ったら」

母はそう言い、面談の書類を書きました。

わたしは、おそるおそる先生に渡しました。先生は当たり前の顔をして受け取り、面談の日にち割りを決めました。

ついにその日が来ました。わたしは朝から上の空で、不愉快な気分は消せませんでした。

「わが家では、代々この学校に入ります」

母は、進路相談の三者面談で急に言い出したのです。

「えっ、わたし聞いたことないよ」

「わが家の子です。先生、それで進めてくださってかまいません」

初めて反論をしたわたしに、母はきっぱりと言い放ちました。

その帰り道、わたしは家に着くまで、一言も話しませんでした。

「おかあさんなんてきらい」

家に入るなり、そう言うのが精いっぱいでした。

（おかあさんなんて、おかあさんなんて、わたしの気持ちなんかわかっていない）

自分の部屋でもんもんと思い悩みました。

（おかあさんは、いったいわたしの何を見てそう言うのか）

自分でもわからないことを、さらさら言う母が、今までと同じとは思えない気がしました。

『いっそ学校がなくなればいい』

（自分自身が怖い。助けて…）

自分の思いに、歯止めがききませんでした。心臓の音が、バクバクと悲鳴をあげ、震えていました。

いよいよ、入試の日になりました。試験はできました。が、気持ちは晴れませんでした。

卒業式のとき、校長先生の式辞の中で、気になることばがありました。

《これからは、たとえ違う制服を着ても、たがいに自分のことばで話してみよう。自分の良さも人の良さをも、見つけられるだろう》

高校は淡い水色の制服です。かれんな少女を思わせる色だそうです。わたしは四月からその制服を着て、春がすみの中を通学しています。部活もサークルも自分で選びました。

これからは、勇気を持って、『自分のことばで話そう』と、思っています。

しろやま会員　かどまさこ